

川上宏奨学基金報告書

題目「訪問介護員の想い——介護現場で生まれるネガティブ感情と感情労働——」

川上宏奨学基金をいただいて、「訪問介護員の想い——介護現場で生まれるネガティブ感情と感情労働——」を完成させることができました。卒業論文の内容と奨学金の使途についてご報告いたします。

1. 卒業論文の要旨

訪問介護員が勤務中にどのようなネガティブな感情を感じ、それらの感情にどのような対応しているか、また訪問介護職のやりがいは何か、といった疑問を持ち4人の訪問介護員にインタビュー・インタビューを行った。

訪問介護員が感じていたネガティブな感情の多くは「恥ずかしさ」や「悲しみ」、「落ち込み」といった非攻撃的なものだった。訪問介護員たちには、怒りのような激しく攻撃的な感情が起こることは少なかった。そして、生じたネガティブな感情への対応策として「家族に話す」、「勤務時間外は利用者の体調などを心配しないよう努める」、「利用者の特殊事情を理解し、ゆるす」といったことを実践していた。

また、訪問介護員は特定の相手と長期間接触することから、ネガティブな気持ちになった「その瞬間」だけでなく、長期的に自らの感情を管理する術を身につける必要がある。長期的感情管理ができなくなると判断した場合、訪問介護員はその利用者の訪問を辞退することで対応していた。

訪問介護員が仕事のやりがいを感じるのは、感謝の言葉やねぎらいの言葉を利用者から直接聞けるとき、また利用者の生活の役に立っていると実感出来る瞬間、そして仕事の出来栄えを利用者から褒められたときであった。

2. 卒業論文を書き終えて

卒業論文では、働く際に自分の感情をコントロールする「感情労働」や、働くときに感じる「ネガティブな感情」についてインタビュー調査をした。4人の調査協力者は、全員が快くインタビューを引き受けてくださり、どの方からも私がした質問に対し誠実に答えていただいたと感じている。ただ、私の卒業論文のテーマは、調査協力者の嫌な記憶に触れるものだったため、相手が負担を感じているのではないかと、という点で申し訳なさが常に付きまとう調査となった。「話を聞いてもらってスッキリした」と帰り際におっしゃってくださる方もいれば、「嫌な記憶を思い出すのはしんどいこともある」と正直にお話しされる方もいた。この論文は、そうしたたくさんの「人の気持ち」を集めてできたも

のであることを私は忘れない。

最後に、卒業論文を執筆するにあたりご支援を賜りました故川上宏先生とそこご遺族の方々に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

3. 奨学金の使途

調査協力者の訪問介護員にインタビューをする際の食事代、参考文献の書籍購入費用、卒業論文を執筆するにあたり使用したUSBの購入に奨学金を使わせていただいた。